

あを

8

2021



山巡り 須賀忠男



焼岳 2455m

上高地大正池の西に

そびえる溶岩ドーム

活火山で未だ南峰頂上へは

立入禁止だ

河童橋から登山のスタート

八月集

もどる

佐藤 竹僊

目鼻口ほほあごおでこチューリップ

春風にのってゐるやう撞木杖

箒目に梅雨のはしりのぼつぼつと

初蟬やマスクをかけにもどりたる

黒潮にのりたる揺れの三尺寝

人類のみなマスクして暑いです

家中に猫の爪あと家を捨つ



梅雨出水

赤座 典子

ほろほろと西洋芍薬金の薬
夏至の昼ゆつくり選ぶチョコケーキ
ぷくぷくと出し巻卵梅雨に入る
振り花小庭に二本紅放つ
夏空へ森田童子の昇りゆく
見舞ふ子へ特効薬のさくらんぼ
束の間の孫よりもらふ夏の風邪
梅雨出水毎年となる秋津島

谷中の午後

秋川 泉

薫風やカバヤコーヒー猫のゐて
散るめだかまたも幾重に広がりて
ひなげしのぽつぽつ続く墓所の道
緑陰や慶喜公の墓所しづか
草笛をうまく鳴らせと兄に急ぐ
坂道の茅花流しにリズムあり
野良に出て真竹弁当老夫婦
守宮の眼うるみて今日は雨模様



虹を見る

大日向幸江

夏の陽に太股晒す川遊び
里芋の葉の朝つゆで筆上手
父の日はいつもながらに雲空
自粛中ついつい食べるかき氷
おすそ分手にチクチクと痩せ胡瓜
茅の輪くぐり吾一人だけ潜りけり

麒麟の日

七郎衛門吉保

命賭しファイルに託す螢かな
赤潮を隠し八年首領の嘘
芍薬の満面の笑み祖母の笑み
柘榴の木天まであるや蟻の道
「世界麒麟の日」との記事夏至の朝
白南風に月も真白く厚く見え
武蔵野の令和神社の茅の輪風
前線を気圧悪戯荒梅雨に



息災

篠田純子

四葩濃しコロナに変異の隠し技
アマゾンの過剰包装梅雨最中
解体作業員の老若多国籍暑し
地下駐車場に押収ベントツ半夏生
梅雨晴れやワクチン二回済み息災
廃校のラヂヲ体操風薫る



四分音符

篠田大佳

入梅や軒より雨の四分音符
おづおづと道をゆづりて夏蜜柑
感光の白き世界の青葉木菟
夕焼けて長蔵小屋のラヂオかな
手水舎の枯れて名越の祓かな



額の花

須賀敏子

この家と同じ歲月額の花
父の日やノンアルコール鰻重を
妹はゆっくり話す文字摺草
夏木立几帳面にはなれぬまま
重き日の心をほぐす花菖蒲
かたつぶり葉の裏にゐて雨の音
作り手の味それぞれや梅のジャム
六月の終はるワクチン接種して



筍御飯

田中藤穂

炊き上げし筍御飯お土産に
おそろしき今年の木々の茂りなり
朝食のミルクあため青葉の卓
医院から駅へと花水木の並木
駅を出て紫陽花の坂人居らず



梅雨

長崎桂子

梅雨しとど一日名曲に親しむ
庭仕事ほっと一服梅雨晴間
捗らぬ計画もあり梅雨晴間
朝陽さし今日もまた蜂はうろつく
思ひきり蚊を叩く痒くにくし朝
初夏の花園名を知らぬ新種群
一面の雲初夏のスーパームーン見えぬ
去年より狭くなりたり麦の秋

梅雨

森なほ子

店の灯の今宵もつかず迎へ梅雨
マスクせる武装集団梅雨の月
落茹でてひと時故郷思ひけり
苔の花石に刻みし名もおぼろ
バラ咲いて薔薇の文字書く掌
振り返る石段急や夏の風
リーダーのつひに捉へし^{はたた}雷神
悠然と卓布を歩く山の蟻



焔収集

山国に母の生涯桐の花
 トロ箱の線路に弾む青嵐
 川風の闇夜を泳ぐ鮭のぼり
 薫風や神父運転隣り僧
 音もなき真空の昼氷菓子
 木もれ陽を編み込むやうにレース針
 大地より辰砂吸ひ上ぐ花柘榴
 銀座の草引きて何かの幼虫出づ
 桜まじ岡田かめやの非売品
 月おぼろ橋のあかりの煌々と
 手を洗ひ口を漱いで新茶汲む

佐藤 喜孝
 森 なほ子
 赤座 典子
 秋川 泉
 大日向幸江
 七郎衛門吉保
 篠田 純子
 篠田 大佳
 須賀 敏子



定家葛一枝乞はれ由来まで
 うすみどり卵とぢする莢豌豆
 合羽着て人の眼をして梅雨の犬
 葉桜の下行けばなほ濡れさうな
 あの人は卒寿の筈と豆の飯
 水溜り大回りする蟻の列
 麦色の髪の少女と虹を見る
 提琴のユーモレスクや梅雨晴れ間
 こどもの日空には空の果がある
 青蛙しみじみと見て緑色
 形見なる庭石菖の咲きふゆる
 春惜む水平リサイクルへ整理

田中 藤穂
 長崎 桂子
 森 なほ子
 赤座 典子
 秋川 泉
 大日向幸江
 七郎衛門吉保
 篠田 大佳
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 長崎 桂子



初てふと蝶にこゑかく飛び去らず

佐藤喜孝

嬉しくてつい「初てふ！」と声かけてしまいました。驚かせてしまったかと、蝶の様子を覗いています。いっこうに動く気配はありません。蝶の方から作者へ、心を通わせている様にも、思えてきます。(純子)

走り茶や窓は両手で開くるもの

佐藤喜孝

世の中に引戸がなくなってきました。引戸は固くて開かず、開け切るときに棧にぶつけてガラスが割れてしまうために、両手で開けるのです。引戸に慣れていない若い人が力加減がでずに引窓を動かす様子と、走り茶が連想されます。(大佳)

春光の峰くだり来る風と水

長崎桂子

春の山の美しい風景を讃えています。絵画のような山の映像に、風を受ける触覚と水の流れる聴覚、あるいは風のおいや水の味を加えて、作者は五感で春の山を楽しみます。短い言葉に省略の妙があります。(大佳)

家々に記憶育てて春灯

森なほ子

家の記憶という比喻には色んな想像が含まれます。太陽に褪せた壁紙や、使い込まれたキッチン、建て付けの悪いドア、部屋独特のにおい。読者それぞれに思い起こされるものがあることでしょう。それぞれが春灯によって、優しい記憶として積み上げられていきます。(大佳)

図書館の休館となり四月尽

赤座典子

近所の図書館は末日になるとよく閉まっています。行きたい時に限って図書館は閉まっています。穏やかな日にいつもは静かに利用者を誘う図書館の灯りが落ちると、なんだか異世界にきたような気がします。今年の四月末から、東京は図書館含め多くの公共施設は緊急事態宣言のために閉鎖されて、日常が異世界になった驚きを詠んだ時事詠という読みもできますが、今回は日常詠として読みました。(大佳)

春の闇サイレンの音遠ざかる

秋川 泉

優しい色の闇にサイレンが鳴り響く緊張感。その音が遠くに去ることで、とりあえず緊張は緩和されるけれども、何か良からぬ不安が残る。句意を追ってみると、こうでしょうか。緊張している時よりも、緊張が解けた時の方が色々考えてしまいがちです。春の闇は、やがて穏やかな心持を取り戻すことを約束します。(大佳)

忘れられた五月人形空仰ぐ

大日向幸江

五月人形が物置に置かれているのを見つけたのでしょうか。埃を被っている様子が見えます。随分昔のことのように読めます。五月人形が飾られていたときを回想したときに作者が仰いだ空が、読者の想像に青々と浮かび上がります。(大佳)

京漬物 赤黄緑の夜半の春

七郎衛門吉保

京野菜の色彩が見えてきます。無機質なもので恐縮ですが、信号機の組み合わせと同じ色調を作者は選んでいて、どれも原色よりも淡い色をしていて、目に優しいです。色彩の優しさは夜半の春と映え合います。(大佳)

木乃伊に胎児CT画像 薄暑なる

篠田純子

ポーランドの博物館に所蔵されているエジプトのミイラをCTスキャンしたところ、上流階級と思しき妊娠26〜30週の妊婦と胎児がミイラではないかと発見されたニュースが下敷きになっているようです。薄暑は作者の実感ですが、妊婦さんと胎児の身体感覚への想像が深まると、薄暑の季語がはまってくるように思います。(大佳)

恭子さんのふれし八重桜に触るる

篠田純子

有名人の名前ならいさ知らず個人的の交友のあった人の名前を詠みこむ。他の人に分かってもらはなくともと云ふ思ひで詠む。物を介しての交はり。ただ「触れる」と云はれただけ。ここがいい。がま池の落葉もいちど裕子と行こつ

(喜孝)

長文に論旨のなくて春驟雨

篠田大佳

長文を書く時は、「誰も傷つけない」「いろいろな解釈できる」「自分に自信がない。」等、忖度、曖昧、ポーズ、言い訳…に、満ちている様に思います。伝えたい事を簡潔に、相手の心に響く様にと、修行中の作者です。(純子)

耐ハイが積まれし歩道春あけぼの

篠田大佳

春はあけぼのと古人は讃へた。耐ハイは庶民の飲み物といふ印象。その耐ハイが歩道に積まれてゐる。荷下ろしの最中なのかもしれない。作者はそんな場に出会った。「春あけぼの」との違和感。現代人の春曙である。(喜孝)

草の餅買うて川沿ひ帰りけり

須賀敏子

桃の節句に草餅を作る風習があるとのこと。買いに来ているので、おそらくは日常の一シーンでしょう。今、外出するにも準備が増えて気軽に散歩するというのもやりづらくなりました。人

の少ないところを選んで、買い物回数を減らして、帰ってきたら手を洗って……などなど。とにかく段取りが多くて、ふらつと外に出ることが懐かしく感じます。お店で選んだ草餅に生き生きとした生命を感じます。(大佳)

山中を旅行く四人春の雲

田中藤穂

四人という人数に想像が膨らみます。友達と行く旅、家族で行く旅、小さなサークルで行く旅……。この人数だと一人舞い上がって小さな問題を起こすなんてこともありそうです。それでも、山のおおらかさでつい許してしまいます。どのような想像をしても、最後は良い旅の思い出として記憶されます。(大佳)



佐藤喜孝

赤座 典子

紫陽花や見目良き時を鶴頸に
バツハ弾くヨーヨー・マの笑み星涼し
恙無き歓声プール開きかな

○この句の眼目は「時」。紫陽花の姿かたちではなく、見目良き時、といったところに感心した。紫陽花の花は特に七変化と云はれるほど変化がある。その好ましいとおもふ時を選んで鶴頸に挿し、賞でてゐる。時の経過の中に美を見付けられた。

○ヨーヨー・マはチェロ奏者。ピアノは弾くで違和感はないが、チェロは「弾く」でいいのかなと変なところで引っかった。宮澤賢治にあったと検索したら『セロ弾きのゴーシュ』であった。納得。奏者が演奏してゐる楽曲の中に没入した時の無意識の笑みであらう。

昔日、所沢の「ミューズ」でマイスキのチェロを聴いた。アンコールにパイプオルガン奏者が

現はれマイスキーと演奏を始めた。弾いた曲は忘れたがオルガンに負けないチェロの音量に驚いた。驚きの記念にマイスキーのCDをもとめた。

秋川 泉

雀蛾の鱗粉の舞ふ奥座敷
金蠅や猫の捕獲をかいぐり
鳴き声は今朝見たかほの雨蛙

○嫌はれる昆虫で一二を争ふ蠅ではあるが、金といふ字がかむさると偉さうに見えてくる。猫がその金蠅に戯れてゐるのかもしれないが、真剣な猫の動作を見てゐると捕獲せんとする気概が猫にうかがへたらしい。「捕獲」も大仰でおもしろいが、「猫の利き手をかいぐり」ともうすこし写生味があつてもよい。

○雨蛙が鳴いてゐる。もしかしたら今朝見た蛙かしら、と思ひながら聞いてゐる。ただ蛙の声を聴くのではなく、見知った蛙の声として聴く。泉さんはこのごろ小動物を詠まれてゐるやうだ。焦点を定めて詠むことは進歩へ繋がる早道。

身の向きを変へたるらしき牛蛙 小島 良子

大日向幸江

水無月の一日二十日と打つワクチン
素麺の喉につかへるお年頃
入道雲子供のやうな吾がをり

○高齢になると食べ物、飲み物を飲み込むとき失敗し気管の方へ入ってしまふ。私もテレビに注意が向いて嚥下に失敗することが間々ある。この句、飲み込みやすい素麺ではあるが薬味などで失敗したのだらうか。「お年頃」には吹きだしてしまった。

○既視感といふのであらう。ある光景・句などに触発されて脳内のどこかにスイッチが入り捉へどころのない空間にしばし迷ひ来む。そんな捨てがたい感じを句にされたのであらう。

七郎衛門吉保

妻の買ふ夕餉「父の日オードブル」
かんでん菓なかにもみせる涼気かな
ビールよし酒席は罰の迷ひ道

○父の日の夕餉に「父の日オードブル」が。きっとスーパーの企画商品だらう。父ではない夫の迷惑ひが一句を成さしめたのか。ほんわかとした面白い一句。

○「かんでん菓」とは寒天でつくられたお菓子の謂いだらうか。違ったらごめんなさい。ショーケースにいろいろの菓子が並ぶ。「なかにもみせる涼気かな」は透き通る寒天で作られたものである。

篠田 大佳

しろがねの斜陽の街を梅雨が濡らす

扇風機爆ぜマネキンの無表情

風鈴の風なき道に満ちにけり

○「梅雨が濡らす」とあるので「斜陽」は夕陽の事ではなく、経済的に傾いた街のこと。「しろがね」は近代的なビル群を私に思はせる。そして色彩を無くしたさびれた街をしつとりと濡らす雨を降らせた作者をおもった。

○マネキンがあるところは通常空調が効いてゐる場所。「扇風機爆ぜ」るやうな場所はだういふところなのだらう。無表情なマネキンは衣装も着せられず出番を待ってゐるのかも。など何回も書き直してゐる内に私なりにイメージが定まった。今回三句とも読み切れなかった。

須賀 敏子

存へて久留米緋のアップパッパ

さらさらの近江ちぢみの夏ズボン

今治のタオルで作る夏帽子

○楽天市場でアップパッパを検索するといっぱい出てくるが、アマゾンでは皆無。日本と外国との会社の違ひか。「存へて」でしみじみと様々なことが回想する。

○アップパッパもズボンも帽子も敏子さんの手作り。見事な処暑の日常。むかしむかし家にあつた足踏ミシンの心地良いひびきが、風鈴・釣忍・水盤などのイメージとともに聞こえてきた。

田中 藤穂

土産なる夏の蜜柑の小さく甘し

句友来て楽しき今日や百合ひらく

朝々を色増し隣の杏の実

○コロナで人と会ふ機会がめっきり減った。こちらから出かけにくい高齢者は猶更人に会ふ機会が減った。そのやうな状況の時の友の来訪の連絡はうれしいもの。来訪された句友との会話も弾んだ。用意して活けた百合も丁度ほころんでくれた。

○起床する。雨戸を開ける。そしていつも目にするのは隣家の杏の木。その木の実が日ごとに緑から橙色に変化してゆく。そのまま食べても乾燥させても、果実酒ジャムにしても。いや失礼。見るだけで目を楽しませ心を豊かにしてくれる隣家の杏の木である。

長崎桂子

父の日や藍染にしネクタイ贈る

父の日は赤福持参すニッコリと

在りし日の父思ふ穴子天麩羅

○最近全くネクタイをしなくなった。もともとネクタイの必要ない生活。なのでネクタイを楽しんだ。この句のやうな藍染のネクタイならまたネクタイを試してみたい。この句のネクタイを贈られた父も大変喜ばれたことだらう。

○赤福を見て父の日は父はニッコリ。私も赤福に目がない。説明の要らにニッコリとする作品。

森なほ子

多摩川の治水記念碑梅雨に入る

螢草思ひ出されぬ夢の数

エビセンへ指の止まらぬ梅雨籠り

○なほ子さんのお住みの近くを多摩川が流れてゐる。一九七四年、多摩川に家が飲み込まれる水害が今でも目に残る。これを機に治水事業が行なはれ、記念碑がったのだらう。と思つたが調べると「治水記念碑・昭和十一年、多摩川の治水工事の竣工を記念して建てられたものです。工事は、大正七年羽田の河口部から開始し、昭和九年世田谷区砧までの間が完成しました。」と知った。それにつけても梅雨とはいはず八月の今、全国各地で河川の氾濫、山崩れ、道路の崩壊とニュースが途切れない。

○螢草、正式名は露草。一日花であるが次から次に咲くので気が付かない。なほさんは夢が多かったやうだ。回頭しても様々な夢があつたので思ひ出せない。忘れてしまった夢は露のやうに消えてしまった。でも螢草のやうにまだ次々と夢で未来を満たしてをられることだらう。

筆記具

相棒

秋川 泉

家ではいつもエプロンのポケットに、ゼブラの油性ペンが入っている。これで、郵便物や宅配便の入手した年月日を必ず記す。これがないと私の日常は回らない。大切な好きな筆記用具『相棒』である。

虹色を超えて

篠田 大佳

学生時代、文具店へ行き、変わった文具を買うのが楽しみでした。なかでも多機能ボールペンが好きで、今でも多色ボールペンとシャープペンシルの組み合わせを愛用しています。コレトというカスタマイズ自由なボールペンがあるのですが、学生の時になかったのが悔やまれます。



モンブラン

田中 藤穂

滝春一先生の『暖流』に入れて頂いて間もなく何故か新人賞を戴き、谷中句会の皆様からお祝いに万年筆を戴いた。紅い色のモンブランで書き易くずつつと愛用していたのに私の不注意でこわしてしまった。その時私の心はガクッと折れたような気がする。初めて万年筆を買ってもらったのは女学校へ入った時だ。子供時代から大人の世界に入るような気がしたものだ。モンブランをこわしてからは万年筆は使っていない。でもボールペンよりやはり万年筆の方が良い字が書ける気がする。

筆

佐藤 喜孝

何度でもいふ。私は悪筆だ。どんな筆記具を使っても変りはない。ちよつと違ふのは毛筆。筆以外で書いた癖字は自己責任である。だが筆のあのかくにゃくには意のままに全くならない。筆で書いた字は自己責任ではない。と決めている。

ペルシヤ猫

どくだみのフェンスを越えてペルシヤ猫
秋暑し身をもてあますペルシヤ猫

ベレー帽

藤重くベンチにベレー帽ひとつ
ベレー帽被りなほして銀杏黄黄

べろ

あたたかしあかごにアインシュタインのべろ

帆

サーフィンの帆柱が増え夏が来し
あるときは蚊帳ふくらみて帆となれり
玄關を出てゆく白帆麦の秋
爽やかやエーゲの風を帆に受けて
柿若葉風のスカート白帆めく
晩秋やテレピンにほふ帆布捨て
春の湖ヨットの帆布新しき
陽炎を突き刺してくる白帆かな
春の海光りてやまずヨットの帆
秋の帆や茜のなかを帰り来る
卯月晴能登半島の白帆かな
人生は冒険といふヨットの帆

保育

保育所と老人ホーム餅を搗く

早崎 泰江
早崎 泰江

森山のりこ
堀内 一郎

佐藤 喜孝

鎌倉喜久恵
後藤 志づ

佐藤 喜孝

芝 尚子

田中 藤穂

竹内 弘子

早崎 泰江

篠田 純子

田中 藤穂

鎌倉喜久恵
佐藤 恭子

須賀 敏子

竹内 弘子

七夕の飾り重たげ保育園

日脚伸ぶ学童保育の帰へり道

保育園ビニールブルの日向水

夏休学童保育門閉ざす

学童の保育所灯る春の夕

夏椿黄昏泣きの保育園

花蘇枹お昼寝時間の保育園

はしゃぐ声保育園でも五月病

人參に人氣のありて保育園

落葉道まだ灯りある保育園

保育園放課の雪がこんごかな

灯のともり春休なき保育園

保育園男の子も姫も甚平着

拇印

契約に初夏がドツカリ拇印捺す

鳳凰

萬緑に鳳凰の眼平等院

松落葉鳳凰堂に日の射せる

高校の放課後中段の構え

箒

箒目の流れもゆるく春隣
葉桜や母とならびし箒神

早崎 泰江

芝宮須磨子

早崎 泰江

早崎 泰江

早崎 泰江

篠田 純子

田中 藤穂

七郎備吉保

佐藤 喜孝

田中 藤穂

定梶じよう

田中 藤穂

七郎備吉保

渡辺 友七

長崎 桂子

田中 藤穂

長崎 桂子

松本 米子

佐藤 恭子

石庭の箒目しるき盆近し

夕立晴魔女は箒を干しゐたり

幼き日泳ぎ覚えし箒川

箒目に打水をしてお味噌汁

アッパッパ箒塵取乳房揺れ

紅錫の羽箒軽ろく夏点前

三尺寝箒に乗って空を飛ぶ

短日や鉄砲担ぎの竹帚

竹帚十町さきの蟬のこゑ

さるすべり帚で水を掃き移す

箒川めぐりて憩ふ山の百合

小鳥くる鐵騎に箒立て

鶴鶴の舞ふかに交す箒川

使ひ初めの箒にかかる桜の実

大観居古壺に紅き箒草

松落葉つかまつてゐる竹箒

高空に箒とはきうるこ雲

玉砂利や落葉浮かせし竹箒

落葉掃く箒の音の軽ろきかな

落葉掃坊主頭の竹箒

箒手に夫見送りぬ濃紫陽花

落葉して異國の人の竹箒

タンポポやいつも使ひし竹箒

芝宮須磨子

篠田 純子

須賀 敏子

芝 尚子

須賀 敏子

芝 尚子

田中 藤穂

後藤 志づ

佐藤 喜孝

佐藤 喜孝

吉成美代子

佐藤 喜孝

芝宮須磨子

東 亜未

田中 藤穂

東 亜未

鎌倉喜久恵

森 理和

早崎 泰江

東 亜未

齊藤 裕子

山莊 慶子

遠藤 実

隣家に手箒残る十二月

寿福寺の箒の音とうぐひすと

竹箒新しくせり夏落葉

冬良夜道路に箒残りをり

竹箒春の匂を掃き寄せて

箒の手止まるでんどん虫の角

冬晴や棟梁が使ふ草箒

青しぐれ本郷通りの竹箒

夜櫻へ位置をたがへし庭箒

消火器とバケツと箒花十葉

かけ廻る子らより高き帚草

愛嬌を色に出しけり箒草

水温む箒の雑巾出番かな

芳紀

芳紀なりアイスクリンの底きれい

花舞ひて芳紀十八猫の跳ぶ

桜草咲いて貴女は芳紀十七才

忘却

忘却と言ふ救ひあり秋の道

忘却の遠目かなたの葉桜よ

忘却などありえぬ戦火五月の夜

咆哮

福祉課に咆哮びびき梅雨寒し

森 理和

篠田 純子

早崎 泰江

長崎 桂子

遠藤 実

早崎 泰江

齊藤 裕子

佐藤 喜孝

佐藤 喜孝

吉成美代子

秋川 泉

大日向幸江

長崎 桂子

佐藤 喜孝

秋川 泉

須賀 敏子

後藤 志づ

渡邊 友七

芝宮須磨子

篠田 純子

篠田 純子

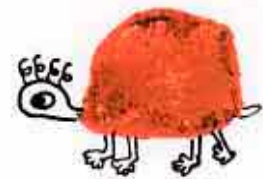
あとがき

短文のお題「好きなペット」

私自身は田螺・泥鰌などでペットとは云ひ難いものを飼った経験がある。それでも飼ってゐると結構かわいいし、心の交流もあるやうに思へるときがある。娘がウサギが通学路にうろうろして居たからと飼ふことになった。また娘が出勤途中雀が落ちてゐたと飼ふ羽目になった。野良猫がいつの間にかやらかひ猫になってゐたこともある。仕事柄積極的に飼へなかつたからしやうがない。このしがらみが解けたら飼ふには歳を取り過ぎてしまった。お客さんに戴いた白椿の鉢、これが私のペットかもしれない。

みなさまのペットの経験おまちします。

(喜孝)



二〇二一年八月号

発行日

八月二十五日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)